

# 跡見学園女子大学学芸員課程 2019年度博物館実習について

跡見学園女子大学 学芸員課程 主任教授  
村田 宏

2019年の博物館実習の概要はつぎの通りである。

- ①春学期における、通常授業時の基礎実習、一日の行程で実施する見学実習
- ②夏期休暇期間を中心とした学外の博物館・美術館等での学外実習
- ③秋学期における学外実習事後指導、および花蹊記念資料館を使用した事後実習

\*\*\*\*\*

## ①見学実習レポート

年度当初の見学実習は、埼玉県立近代美術館(埼玉県さいたま市浦和区常盤9丁目30-1)で行われた。一般入館者として展示作品を鑑賞するというとは違って、学芸員の方の懇切な解説を伺いながら、ファシリティ部門を参観できたことは、学芸員課程履修生にとってまことに貴重な体験となったにちがいない。ご多忙のなか、興味尽きない講話と館内案内をいただいた埼玉県立近代美術館学芸員の平野到氏に心より御礼申し上げる。

参加者の「見学レポート」(抜粋)を掲載する。

## A.S.生

まず駅から近く、公園の中にあり、無料公開のスペースがあるということが、人々の生活の近くにある美術館であるといった印象を受けた。そして建物の設計が黒川紀章というところに最初驚かされた。福井県立恐竜博物館や国立新美術館のような大きな設計しているイメージが私の中では大きく、意外と身近なところを知っている人の建物があるといった驚きがあった。「インポッシブル・アーキテクチャー」という形でさまざまな不可能な建物の企画展を実際にその展覧会に出てくる建築家の設計した近代美術館で展示をするというのは、学芸員の研究成果の発表という意味だけでなく、来館した人々の興味を展示物以外にも持ってもらおうという点でも、有意義、かつおおいに興味深いことと思われた。

予算や運営等の話は授業ではきいていたが、予算運用や集客目標など、実際の運営の難しさ、企画の大変さがよく理解できた。招待客ではチケット収入がないなど、ただ展示を見に行っていたときには知らなかった事柄を再認識した。実際、展示している内容が話題になるのは難しいという点は大きな問題だと思われる。人々の間で話題にのぼり、それが集客に反映されるのが如何に困難であるかという話を聞いたのが良かった。

椅子のコレクションについて、初代の館長の方針で、入館者に座ってもらおうというコンセプトに感動した。メンテナンスが大変だが、座り心地を体感できるのはすばらしいと思った。世界にひとつという椅子ではなく、ライセンス取得の一般に販売されているものを展示しているということで、さりげない趣が印象的である。

バックヤードでの話では、ハロン消化が作品に悪い影響を与える可能性があり、むしろ水の消化の方が安全であるとも言われている現況を伺えて勉強になった。収蔵品の管理保全をどのように行うのが最善なのか、模索が続いていることを知った。

ミュージアムショップの話もきけたことが新鮮であった。美術館、博物館によってショップの雰囲気がかかるのは当然であるが、外部に完全委託している場合と、友の会のような組織が経営している場合があり、運営主

体がさまざまで、いずれにしても、収益をあげることが難しいという話は有益であった。

通常の美術館見学では知りようのない部分までしることのできたとてもよい機会だった。

## S.M.生

埼玉県立近代美術館は1982年に開館した。建築家黒川記章による設計でちょうど県立博物館ブームの時期に建てられたという。学芸員の方々は、主に「企画展チーム」「常設展チーム」「広報・教育普及チーム」に分かれているようだ。

公園のなかにある美術館は、普段から児童も多く訪れる場所でもあり、教育普及活動にも力をいれているようで、子供向けのワークショップや団体への解説、大人向けのスライドトークなど多彩なプログラムを用意して、さまざまな年代のひとが楽しんで参加できるような取り組みを行っていることが印象的だった。常設展はモネ、ゴッホ、横山大観など多岐のジャンルにわたる展示を見ることができて面白かった。作品を一点購入するのにもじっくり時間をかけて吟味していることを知ってから見学すると、学芸員の考え方やこだわりも見えてきてより楽しめた。また、常設展のほかに、年4回の企画展を実施していて、その実際の企画展の立案も初めて聞くことができて興味深かった。予算内でテーマ、来客数やグッズの売上を予測しながら進行させるという、細かく難しい作業を経て企画展が実現していくことの大変さを改めて知った。

お話を伺った後のバックヤードの見学もとても貴重な経験だった。一つ目の、主に油彩の作品を収蔵する収蔵庫を開けることも簡単にはできず、学芸員しか入れないため清掃も学芸員で行うという。24時間常に空調管理されていて、衛生的にもかなり気を使っているというのは作品を保存する上で当たり前のことだが、作品は博物館・美術館でもっとも大切にされているのだと実感した。初めて見ることで、作品を移動させる荷物用エレベーターはもちろん大きかったが、3m四方でも小さいらしく、現在、埼玉県立近代美術館で使っているエレベーターももう少し大きいほうが良かったと仰っていて驚いた。作品搬入させるトラックヤードと呼ばれる場所も見ることができたが、トラックがしっかり入る屋根や、搬入の際にシャッターが閉められるトラックヤードがないと作品を貸出しを嫌う美術館も多いようだ。作品を素早く、安全に移動できるように収蔵庫とエレベーター、エレベーターと展示室はそれぞれ近くに設置されているようで、作品のことを隅々まで考えているのだと実際に目で見て知ることができた。二つ目の収蔵庫は版画や彫刻などの収蔵庫で、一つ目の収蔵庫と同様に簡単に開けることはできない。

警備室に24時間、人がいることなども含め、作品と館内の安全を守ることが、どれほど大切であるか、それがどれほど多くの人の努力で成り立っているのかを、実際に見学してより理解できたと思う。作品はもちろん、ミュージアムショップの絵葉書一枚にいたるまで来館者のことを考え、一人でも多くが満足できるように館内のあらゆることに注意を払うこととはとても大変な仕事であると思うが、そんな支えがあればこそ、私たちは日々博物館や美術館を楽しむことができるのだと強く感じることができた。

## M.O.生

埼玉県立近代美術館は、埼玉県さいたま市にある北浦和公園内にある美術館である。今回の見学では、埼玉県立近代美術館の学芸員である平野到さんから、普段は聞くことのできない美術館事情や入ることのできない美術館の裏側をたくさん見せていただいた。企画展を行う際にはどれほどの売上が必要になってくるのか、限りある予算の中からどのようにやりくりをしていくのか、埼玉県立近代美術館の大きな魅力の一つである椅子のコレクションの維持の難しさ、また小、中、高校生を団体で受け入れ、収蔵品の解説を行ったり、毎週土曜日の親子向けワークショップでは、埼玉大学の学生たちの協力を得ているといった活動のこと、さらに館内の見学では、収蔵庫や他

の美術館から作品を搬入する際に使用される場所やエレベーター、火災が起きた時の対策等、貴重なお話をたくさん伺うことができた。今後、博物館の学芸員をめざすにあたり、さまざまな指針を得ることができた。

今回の見学でとくに印象に残った点、感心した点は二点ある。

まず、一つ目は、埼玉県立近代美術館は常設展や企画展には料金が必要だが、入館料は無料であること。これはこの美術館の大きな魅力をなしている。実際、入館者は、展示されている椅子のコレクションに実際に触れたり座ったりすることができる。美術館は公園内にあることや入館料が無料なこともあってか、親子連れの方や子どもたちの姿も多く見受けられた。誰でも気兼ねなく入れるということは、美術館の利用者にとっては親しみやすい美術館として歓迎すべきことと思われた。

次に二つ目は常設展示についてである。埼玉県立近代美術館の常設展示の展示室に入ってすぐのところの小さなスペースにある解説書。これは埼玉県立近代美術館が収蔵する作品のはがきサイズの解説書で、表にはモノクロの写真と作者、題名、制作年、サイズ、種類が、裏側には作者と作品の簡単な説明が記載されており、来館者の作品理解を促す格好の資料であり、持ち帰り可でもあるので、とても有益だと思った。また館内と屋外の作品マップというものがあり、どこにどの作品があるかすぐわかるようになっていて、初めて来館した人にはとても便利であると思った。ただ、これは私の知るかぎりでは、常設展の展示室にしか見当たらなかったもので、受付や目立つスペースに置いてみたら、もっと効果があがるのかもしれない。

さらに私がかつとも感銘を受けたことがある。それは埼玉県立近代美術館の収蔵品の中で、現在、他の美術館に貸し出している作品については、当該作品の写真と貸し出し先、簡潔な作品解説を記載したカードが貼ってあるということだ。私が今まで訪れた美術館、博物館にはあまり見かけることがなかったので、これはこの日の一番の驚きであった。

収蔵作品について来館者に理解してもらうことも大切であるが、見て楽しい展示を行うことも重要だと思う。その両立は難しいかもしれないが、埼玉県立近代美術館は、その両方を実現させている美術館であるように思う。今回の見学の素直な感想である。



■春学期の基礎実習は、美術資料、民俗資料の取り扱い、写真撮影の基本を中心に行われた（専任教員1名、兼任講師2名）。必要な基礎的修練は十分に行われたと考えている。

## ②夏季学外実習

夏季の学外実習は、以下の10館で行われた（順不同）。各館にはいつもながら懇切丁寧なご指導とご便宜を賜りました。あらためて厚く御礼申し上げます。

弥生美術館 高崎市美術館 狭山市立博物館 日本近代文学館 東京都江戸東京博物館  
松戸市立博物館 東玉人形の博物館 千葉県立美術館 日本カメラ博物館 古代オリエント博物館



\*\*\*\*\*

## ③模擬展示実習

秋学期は、夏季の学外実習で体得した事柄をふまえ、学期末の花蹊記念資料館での模擬展示に向けて企画立案の作業にとり組む。履修者は、希望によって民俗・歴史班、美術班に分かれ、模擬展示の実施計画を練り上げていく。卒業論文提出の時期が迫るなか、各人がアイデアを出し合い、工夫を加えながらオープンを迎えることになる。

# 博物館実習生模擬展示

## 歴史民俗班展示

「1875 振り返る始まりー跡見の学び舎での記憶ー」

## 美術班展示

「花を纏う女たち」

会 期 2020年1月28日(火)～2月6日(木)  
会 場 跡見学園女子大学花蹊記念資料館 展示室1  
開催時間 9:30～16:30  
日曜・祝日は休館  
主 催 跡見学園女子大学学芸員課程  
入館無料  
入館者数 328名

歴史民俗班テーマ  
1875 振り返る始まりー跡見の学び舎での記憶ー

博物館実習生  
模擬展示

美術班テーマ  
花を纏う女たち

本学学芸員課程4年生の実習発表

2020年1月28日(火)～2月6日(木)

開館時間 9:30～16:30  
休館日 日曜(入館無料)

会 場 跡見学園女子大学  
花蹊記念資料館(展示室1)

〇問い合わせ 花蹊記念資料館  
埼玉県新城市中野1-9-6  
☎048-478-0130



# I 「1875 振り返る始まりー跡見の学び舎での記憶ー」

歴史民俗班 担当学生名 大串 真未 小林 明日風 齋藤 綺乃 櫻田 七海 濱 瑞歩 丸山 紗世



## 展示趣旨

2020年に跡見学園は145周年を迎えます。その記念すべき年に「跡見」の原点である跡見花蹊と明治・大正期の女学生の姿を振り返りたいと思います。

本展は跡見学園創立者である跡見花蹊の人生や教育方針、当時の女学生の授業や服装の軌跡を辿ります。資料や作品を通し、私たちが過ごす現在まで跡見学園に受け継がれてきた歴史を見つめなおし、その伝統や精神を次の世代に伝えていくきっかけになりましたら幸いです。



## II 「花を纏う女たち」

美術班 担当学生名 伊藤 沙菜 榎本 津麦 澁谷 多恵 中田 樹



### 展示趣旨

花は古くから女性を美しく飾ってきただけでなく、「立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花」というように、女性の美はしばしば花に譬えられてきました。美術においても花と女性はお互いの魅力をひきたてあい、それらをモチーフにした作品は万人の心を惹く美しいものばかりです。

本展では日本と西洋に分かれ、女性が主題の絵画の中での花々の描かれ方を追い、やがて東西の美術がジャポニスムや万博を経て交流して融合していく様子をご紹介します。うっとりするような絵画に咲き誇る花々と女性をご堪能ください。

